

# KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第91号 平成31年3月20日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



妙光院の馬頭観音  
(中央区神仙寺通)

## 妙光院の馬頭観音

王子動物園の西側、神戸文学館や王子スポーツセンター横の急な坂道を上って行くと、摩耶山への登山口の手前、青谷の高台に護法山妙光院という天台宗のお寺があります。門を入ると、正面の石段の上から、日本最大で高さ六メートルの馬頭観世音菩薩像が厳しい表情でこちらを見下ろしています。

馬頭観音菩薩は、他の観音菩薩とは異なった憤怒の形相をしています。仏教の六道のうちの畜生道を司ることから、馬や家畜の守護神として戦で馬を使用した武士、農作業や荷物の運搬で馬と生活を共にしていた人々に信仰されてきました。

妙光院の馬頭観音は昭和八年（一九三三）に作られました。寺の前の山道で、馬が荷車を引いて困っている様子を、当時の住職が哀れに思い建立したそうです。現在の像は再建されたものですが、乗馬や競馬など馬に関わり愛馬の無事を願う人々だけではなく、犬や猫の健康を願う人々など、多くの人が参拝に訪れています。

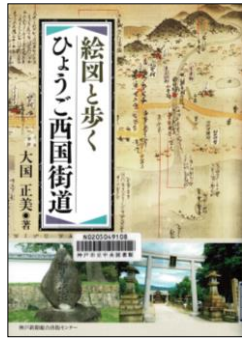
参考：道谷卓『神戸歴史トリップ』  
(中央区役所)他

【絵図と歩くひょうご西国街道】 大國 正美（神戸新聞総合出版センター）

江戸時代、萩（山口県）の毛利藩に『行程記』という街道絵図があった。参勤交代で江戸へ向かう藩主のために主要街道が描かれたものだ。その中から兵庫県内分を抜き出し、図版を見開きで紹介する。四章から成り、第二章では、神戸界限を取り上げている。

著者は読み解くうち、当時の表記には、誤りが少なくないことに気が付く。これを訂正しながら、地誌としてもより正確なものを目指した。

美しい絵には伝承や和歌も添えられている。絵師の興味を引いたそれらにも注目したい。



【幕末維新の兵庫・神戸】 山崎整（神戸新聞総合出版センター）

本書は、江戸末期から明治初期までの兵庫県のできごとを、地方からの視点で読み解いている。

例えば、ハリスは日米修好通商条約をまとめた人物だが、兵庫県にとつては「兵庫を開港した」人であった。西南戦争といえは九州だが、神戸は補給の後方基地の役割を担い、その後、経済力と知名度をもとに高めることとなった。切り口を変えれば見え方も変わる、歴史の面白さが感じられる。

【青い目の人形メリーの旅】 西村恭子（神戸新聞総合出版センター）

昭和のはじめ、友情と平和の願いを込めてアメリカから「青い目の人形」が贈られた。太平洋戦争の中で敵国の人形たちは過酷な運命を辿った。一万二七三九体のうち、現在全国で確認されているのはわずか三三七体である。

播磨町に残る人形メリーは平成二十二年に町の平和大使に任命され、県内の「友達」を訪ねる旅に出る。戦禍や災害の中で人形を守り続けた人々の想いが、旅路の中に鮮やかに描き出されている。

【わたしたちの住吉】 内田雅夫編（住吉学園・住吉歴史資料館）

東灘を流れる住吉川西岸にあった住吉村の古代から戦後に神戸市と合併するまでの歴史をまとめた。村が大きく発展したのは江戸中期。水車を使った製油や精米、御影石の切出しで財をなす豪商があらわれる。明治末から昭和にかけて「日本一の富豪村」と呼ばれ、多くの財界人が邸宅を構えた。

詳細な目次から本住吉神社、だんじり、渦森銅鐸、灘購買組合など興味のある項目を開いてみては。

【父より娘へー谷崎潤一郎書簡集】

【鮎子宛書簡二六二通を読む】 谷崎潤一郎著 千葉俊二編（中央公論新社）

谷崎潤一郎と最初の妻千代の一人娘として生まれた鮎子は世間を騒がせた両親の離婚、再婚に翻弄され多感な娘時代を過ごす。離婚により谷崎の元から去った娘へ宛てた二六二通の手紙をすべて収録。

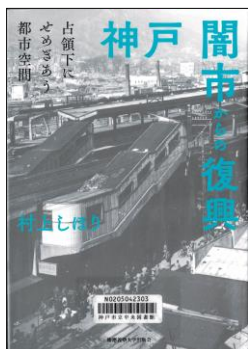
昭和五年、十四歳の娘への絵葉書から始まった手紙は、昭和三十三年まで続く。多くが未公開であった書簡からは、時にそっけなく、ある時は娘を案じる谷崎の父としての顔がのぞく。

【神戸鬧市からの復興ー占領下にせめぎあう都市空間】 村上しほり（慶應義塾大学出版会）

終戦直後、三宮から元町にかけて、高架下に出現した鬧市を戦災復興の原点として捉え、発生から衰退の軌跡の中で商業空間が根付き展開していく過程を膨大な資料を駆使して明らかにしていく。

営業者や住民など様々な主体がGHQや地方行政が行う取り締まりや施策と激しく衝突しせめぎ合う中で、戦前にはなかった都市商業集積が生み出されていった。筆者はそこに地方の中心市街地形成を捉え直そうと試みている。

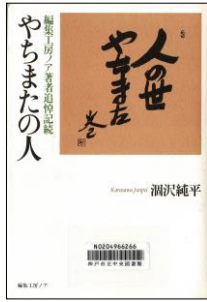
戦後の都市空間に焦点を当てた実証研究の成果である。



やちまたの人―編集工房ノア著者追悼記続

関西の文芸書を出版し続ける編集工房ノアの社主が、鬼籍に入った作家たちとの思い出を語る。神戸の詩人伊勢田史郎が亡くなった時には、仲間と家を訪れ、

蔵書の整理に尽力し、生前打合わせしていた本が完成した。図書館や書物に親しむ日常を随筆に遺した須磨の作家・三輪正道については、人柄や最後の様子が綴られている。「やちまた」とは足立巻一の著書に由来する。生きてゆくことは絶えず幾つにも分かれた道の一つを選ぶことであり、人と人のつながりもまた同じであるという。作家とのつながりを大切にしてきた著者の思いが伝わってくる。



エエマイシャツを着た男たち 佐藤加奈フォト 岡田嘉夫シャツデザイン (出版ワークス)

画家の岡田氏は八十歳を過ぎ神戸で老後を過ごす中、引きこもりがちの高齢者が多いと気づく。彼らを世の中に引き出すのは「おしゃれ」だと考えて本書を企画した。氏がデザインした派手で奇抜なシャツ姿で登場するのは、街で出会った人々だ。日常の風景の中にこやかに、あるいはスタイリッシュに、装いを披露する。年齢を重ねた男たちがカッコいい。

黄金の代償 福田和代 (KADOKAWA)

妹の治療費を稼ぐため、金塊強奪に手を染めた葉山。強奪には成功するが、相棒・クロエは死亡し、金塊は行方不明になる。葉山は相棒の死の真相と金塊を求め、仲間と奔走する。一方、この事件を捜査する警察は、二十数年前に三宮の街中で華麗に五億円を盗んだある事件との関与を疑う。

実在する事件を織り交ぜ、神戸各所を舞台にしたのは、神戸をよく知る著者ならではの重要な手がかりを掴む場として図書館も登場している。

II その他の新刊 II

〈異〉なる関西 日本近代文学会関西支部編集委員会編 (田畑書店)  
インド倶楽部の謎 有栖川有栖 (講談社)

災害看護の本質―語り継ぐ黒田裕子の実践と思想 柳田邦男 酒井明子編著 (日本看護協会出版会)  
再論 朝鮮人強制連行 飛田雄一 (三一書房)

神戸 その⑮ あんな人こんな人

城ノブ じょう・のぶ 社会事業家

明治5年 (1872) ~ 昭和34年 (1959)

城ノブは明治5年伊予国 (今の愛媛県) に生まれました。18歳でミッションスクールの松山女学校に入学しますが、洗礼を受けたことで父親に勘当されます。家を出て横浜の聖經女学校神学部に入學し、卒業後は各地で教師などをしながら伝道活動を行い、婦人運動にも携わりました。大正元年40歳の時、同郷の寺島ノブへから頼まれ、彼女が経営する神戸養老院の運営を手助けするため来神します。



そして大正5年、神戸婦人同情会を創立し、下山手通の小さな軒屋で婦人救済の社会事業を始めました。女性の地位が低かった当時、貧しくて身売りされた娼妓や身寄りのない母子など、苦境にある女性たちを保護する必要性を強く感じました。大正8年には自殺の名所であった須磨海岸付近に「一寸待て」の立て札を掲げ、「死なねばならぬ事情のある方はいらして下さい」と呼びかけました。そうした活動は新聞や雑誌で紹介され、全国から助けを求めて多くの女性が訪れました。その後、受入施設を拡充し灘区青谷に母子寮と愛児園を開設します。戦争で施設が焼失しても再建し、87歳で亡くなるまで、社会的弱者であった女性の救済と自立支援にその生涯を捧げました。



参考：『一寸待て、神は愛なり 城ノブ物語』澤美晴著・発行 (2012)  
写真：『神戸婦人同情会二十年史』城一男編 (神戸婦人同情会 1935)

花時計

神戸のランドマークとして長年親しまれてきた「こうべ花時計」の移転セレモニーから、約四か月が経ちました。市役所本庁舎の再整備のため姿を消し、しばらく寂しい日が続きますが、この機会に今までの花時計の歴史を振り返ってみました。

神戸に花時計が完成したのは、昭和三十三年（一九五七）のことです。それまで日本には花時計がありませんでしたが、第十三代市長の宮崎辰雄氏が助役であった時、出張で欧米を訪れて花時計を見たことが発案のきっかけになりました。

高度経済成長期は、日本全体が開発に追われていて、景観施設を作るという考えがほとんどなかった時代です。それでも宮崎氏は、平和の到来を告げるような花時計を見て、神戸の街が求めているものはこれだと思ひ、設置を決意しました。

世界初の花時計があるスコットランドのエジンバラやフランスのベルサイユなど四か所を視察した中で、

スイスのジュネーブのものがモデルに選ばれました。

日本で初めての試みということで、課題も多くありました。時計の文字盤の上半分を花壇にする難しさはもちろんのこと、六メートルもの文字盤を使う時計自体、国内にはほぼ前例がありませんでした。そこで、ジュネーブの花時計の設計図面を取り寄せるなどして、海外の事例を参考に研究を進めたそうです。

資金面では、高価な景観施設に公費を使うべきではないという風潮がありました。市民団体の神戸フライングサイテイをはじめとする、市民有志や民間企業からの支援を受けることができました。



第1回図柄



【花時計】より

花時計に使用する花は、背の低い品種が適しています。ペチュニアやハボタンなど、季節ごとに違う花を揃え年間数十種類を植えています。花の確保や種類の決定にも、当初は

様々な苦労があったようです。初めて植えられた花は、中央区にある相楽園の花畑で育てられたものでした。

初めの数年間は相楽園の花を使用していました。使う花の種類が絞られ一種類ごとの株数が増えるようになると、複数の場所で花を用意する必要が出てきました。委託栽培のほか、正式に開園する前であった須磨離宮公園にも花畑を造ったそうです。

花の種類によっては、動物の被害にあうこともあります。昭和四十七年（一九七二）の春には、植えかえ後三時間でハトに草花を食べ尽くされてしまったことがありました。テストの結果、キク科の花が食べられにくいことがわかったため、マリィゴールドやコギクなどの使用頻度を増やすことになりました。



イニエスタ選手、ようこそ神戸へ

花で描く図柄は、季節に合ったイラストや、神戸まつりのようなイベントをテーマにしたものなど、パリエーションに富んでいます。ヴィッセル神戸にスペイン代表のイニエスタ選手が加入したことを歓迎する図柄などは記憶に新しいのではないのでしょうか。記念行事ではデザインを

市民に公募することもあり、より多様な姿を楽しめます。

第一回から昭和の終わり頃までの図柄は、昭和六十年（一九八五）発行の『花時計』に掲載されています。ジュネーブの花時計に似せた図柄から始まり、初めは時計の文字盤を花で表現することが多かったようですが、オリジナルの幾何学模様、そしてテーマを持った絵柄に変わっていく様子を見ることが出来ます。

平成十三年（二〇〇一）頃からの図柄は、神戸市のホームページで公開されています。デザインと実際の写真を併せて見られ、懐かしい姿を思い出すことができるかもしれません。

いったんその歴史に幕を閉じた「こうべ花時計」ですが、東遊園地南側への暫定移転を経て、新たな日々を迎えようとしています。最終的な移転先は決まっていますが、花時計が神戸の街で親しまれる存在として、変わらず時を刻み続けることを願っています。

参考文献

『花時計』神戸市公園緑化協会編・発行  
『日本の花時計』矢木勉著・発行他